## 「令和」の由来・語源

万葉集の梅の花の歌三十二首の序文にある「初春の令月にして　気淑く風和ぎ　梅は鏡前の粉を披き　蘭は珮後の香を薫らす」から引用。これまで日本の元号の由来は全て中国古典（漢籍）でしたが、初めて日本の古典から選定。
英訳では「Beautiful Harmony＝美しい調和」。

改元記念

# 平成から令和へ。

奉祝・令和！
四季を愛でる日本人の感覚にふさわしい新時代が始まりました。
平成は約30年間にわたる時代の幕を閉じましたが、皆さんの胸に去来した平成の思い出は何ですか？
新時代「令和」の未来に期待を寄せながらも、今一度「平成」を振り返ってみましょう。

## 平成がもたらした暮らしの変化

### 誰もが携帯を所有する情報社会の到来

固定電話が主流だった昭和を経て、どこにでも持ち運べる「携帯電話」が平成を席巻しました。平成10年代には写真撮影、音楽再生、インターネット機能などが加わり、平成20年代には、先進的な携帯機器「スマートフォン」の登場によってAIやアプリ、SNS（会員制交流サイト）など、これまでと全く違った情報活用ツールに進化しています。

こうした機器は便利な反面、ネット依存やいじめなど、トラブルの一因になることが全国で報告されました。

そのため、市では平成26年から中学生によるネットトラブル防止の取り組みがスタートしました。ネット利用の共通ルールを制定し、全中学校で共有しています。

中学生が主体となって意見を交わし、ネット3カ条を啓発

### 驚きと喜びに沸いたミレニアム

ミレニアム（2000年）の平成12年は、当時のコンピュータが日付を西暦の下2桁で管理していたことで、2000年を1900年と認識して誤作動を起こすと予想されていました。ライフライン機能の停止や弾道ミサイルの誤発射など、様々な不安が世界中に広がりましたが、大規模なコンピュータプログラムの修正が行われたことで、結果的に大きな混乱は起きずに終わりました。

この年は、ミレニアムを祝した消費で景気が上向いた年でもあります。

ミレニアム（2000年）のJR小松駅前

## まちの品格を高めた郷土愛と市民の絆

平成の時代は、阪神・淡路大震災（平成7年）、東日本大震災（平成23年）などの自然災害で、日本が傷ついた時代でもありました。石川県で起きた能登半島地震（平成19年）では、小松は震度4の揺れを記録しています。

まちが傷ついた事案といえば、ナホトカ号重油流出事故（平成9年）があります。島根県沖でロシア船籍タンカーが沈没し、大量に流出した重油が安宅海岸にまで漂着したことで、環境汚染や漁業被害が懸念されました。荒波のある岩場では船や機械による油回収が困難であるため、ボランティア（登録者7千人以上）の手作業によって、美しい海岸を取り戻すことができました。

同じく「ふるさと」のために、力を尽くした事案では、第66回全国植樹祭いしかわ2015（平成27年）があります。全国から1万人以上の人々をお迎えするにあたり、美しい花々と優しさに満ちた品格が漂うまちを目指した「グッドマナーこまつ」と「フローラルこまつ」の取り組みが、開催の約1年前からスタートしました。

当日の大会運営においても、団体・企業をはじめ、市民の皆さんから多くのご協力をいただき、小松の自然や伝統文化などの魅力を全国に発信できました。

まさに小松のまちづくりの原動力は、高い市民力と絆の強さにあることを如実に示した大会と言えます。

## 国際化の進展で脚光を浴びる日本

昭和59年、小松空港に国際線新旅客ターミナルビルが完成します。その後の平成では、国際線の定期便や国際貨物便の就航が盛んになり、小松空港は「日本海側の拠点空港」として重要な役割を果たしてきました。そして、官民を挙げた訪日誘客の取り組みや平成25年に「和食」のユネスコ無形文化遺産登録を追い風に、日本を訪れる外国人旅行者は大きく伸びています。

人材育成の観点では、平成30年に新設された公立小松大学において「国際文化交流学部」が設けられました。

さらには、2020年の夏季オリンピック・パラリンピック競技大会の東京開催にあたり、小松は施設の充実ぶりや空港が近いことなどが評価され、7カ国（日本を含む）のカヌーチームの事前合宿地に選ばれました。合宿滞在では、国際舞台で躍動する選手たちへのサポートや市民交流を通じた国際理解の広がりも期待されています。